研究、論説、詩歌、随筆の小誌（未発表のもの）
『羔』（No.1）
――1932年11月――

1932年11月
小池辰雄

（内容）

『羔』 創刊の辞
新生にあたりて
詩篇（1）（自由訳）
　第1篇　第2篇　第3篇　第4篇　第5篇
（附） ヘブライ語と私
「いのり（1）」
　1．いのり以前の問題
「眠りなき夜のため」上巻（1）　ヒルティ
　10月6日　10月7日　10月16日　10月21日　10月31日
「星のたより」（1）
　（其1）「人生のうた」　ロングフェロー
　（其2）「矢と歌」　ロングフェロー
「樅の日記」（1）　小池政美
「樅の日記より」（1）　序（編者）
「樅の日記」　序
　1918年11月23日（新嘗祭）
　11月24日（日曜）
「みどり葉」（1）

＊

「明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう
『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔。われかつて「わが後に来る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。
我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』」

――ヨハネ伝福音書第1章第29～30節

＊

『羔』 創刊の辞

神の羔の御恩恵ゆえにこの罪びとの今日はある。

限りなき恩寵を感謝し聖名を讃美せんこと、(1)神の国と神の義とを求めんことが、この小誌『羔』のすべてであらねばならぬ。

世の一切の言が消え去るとも、(2)神の聖言は永劫に立つ。(3)万象が朽ちゆくとも羔のみは久遠の実在であり給う。羔が在まし聖言が立つのであれば、われらは安んじて、(4)大いなる日を待ち望まんとおもう。(5)聖国の来らんことを！

〔註〕(1)マタイ6・33。(2)マタイ24・35。(3)詩篇102・26～27、イザヤ51・6。(4)ゼパニヤ書1・14、ヨエル1・15、2・1～3、11。(5)マタイ6・10。

三十路に入らんとする秋の半、私はわが前生を終えた。そのすべてを知悉し給うはわが神あるのみである。あわれなるかなこの罪びと、奇しきかな神の摂理、深きかな主の愛。今や私はわが「永遠の愛」と共に新しき生命に甦った。この期ありてかこの小誌は生まれ出たのである。我らの生涯がいのりであるならば、これもまた我らのいのりの外何ものでもなかろう。地を去る日まで絶ゆることなき香として天に昇らんことを。

聖霊とこしえに我らの導者にてあり給わんことを。

夜もすがら雨風あれにし朝ぼらけ
　虹は立ちたり大空高く。

１９３２年９月１日払暁。
ある重大な決定が私の胸に奥に於てなされた。

＊

新生にあたりて

「すべてをお任せして何事も天のよき様にと祈るのみでございます」
――第一信より

新生の旅の途にて我らの負うべき一つのものがある。そは十字架である。我らはイエスに従うものであるからである。我らはわれらの家庭を問題とすまじとおもう。我らが生を享けたのはそんなためではなかった。われらは世を渡らんためにつくられたのではなく、神を知らんがために生まれたのである。神の羔以上に我らが愛してよいものは一つとして存せぬことを知らんがために我らは在るのである。羔を愛する愛あらんか、我らはまこと

の愛を有つものであろう。源なくして水は流れ出でぬからである。我ら相互の愛が愛として問題視されるならば、そは禍なる哉である。我らのまなこをしてシオンの山に立ちたもう羔に向けしめよ。さらば我らはまことの愛に生き得るであろう。我らは一つである。生くることは人を愛することであることを多くの傷を受けてこそ学びたくおもう。

「神はその独子を賜いし程に世を愛し給う」

のである。我らは先ず神からかく愛されたのであった。

神様、どうぞ我らの魂を砕いて下さいまし、我々はあなたの奇しき御導きの中に今日に至りました。あなたは我々を棄て給わじと信じます。願わくは我らの弱きをおあわれみ下さい。あなたの義が我らの骨であり、あなたの愛が我らの血であり得ますように。神様、ある時はあなたのみが愛し、あなたのみが戦って下さるのでなければ、到底堪えられぬと存じます。そうです、いつもそのはずなのでございます。私共は何ものでもございません。あなたが私共であって下さい。日毎に私共の荷をお負いになって下さい。力となって下さい。どうか信頼が私共のすべてでございますように。私共自身などは本当にたたんでしまったのでありますように。私共の眼が大いなる羔の日を望むものでありますように、心を聖国にお据えになって下さい。人々の心がどうか救われますように。聖名の栄光がすべてのすべてでございますように。

我々の贖主キリストのみ名により、アーメン。

己を卑うして死に至るまで、
十字架の死に至るまで順い給えり。
――ピリピ書第2章8節

＊

詩篇（1）（自由訳）

第1篇～第5篇

原文　ルドルフ・キッテル編　ビブリア・ヘブライカ　第2巻　プサルミ（908頁～1024頁）

原文（題本）　Rudolf Kittel : Biblia Hebraica Ⅱ．Psalmi (908 ～ 1024)

主要参考書　Kautzsch : Die Heilige Schrift des A.T. Ⅱ .4.Aufl.

Bertholet : DasBuch der Psalmen

Die Psalmen übersetzt von C.Kautzsch. (Paul Siebeck)

Commentery on the Psalms, by Delitzsch. Ⅲ Vols.

The Treasury of David, by C.M.Spurgeon. Ⅶ Vols.
Die Bible. A.V.& R.V.
聖書

自由訳とは何の謂ぞや。
詩篇はいのりの書であり、讃美のうたである。
全心より溢れいづるまことある言の流れであり、
聖霊に感じて発する魂の息吹であらねばならぬ。
されば何よりも先ずそはいのちあるものである。
内的に形式をおのずからつくりゆくものであって、
断じて形式によって統一されるはずのものではない。
まことの詩とはかかるところに成る。
詩篇、此くの如きものである限りその翻訳もまた
然らんことを期するのが訳者のねがいであり努力である。
「主のみ霊のある所には自由あり」（コリント後3・17）
由って以て本試訳の名となす。

＊

第1篇

1 **幸なる哉斯かる人、(1)悪き者らと謀略に歩むことなく、**
(1)罪人らの道にも立たず、(1)嘲る者らの座にも坐ることのない、
2 **エホバの法にこそ彼の歓びがあり、その法を日も夜も想う人。**
3 **彼は水流のほとりに植えられた樹にも似る**
期に及んで実を結び、葉もまた萎れることのない樹にも似る。
だからすべて彼のなすところは栄えよう。
4 **そうではない　かの(1)悪き者らは、**
あだかも風の吹き去る粃糠である。
5 **されば(1)悪き者らは審判に立ち得ず、(1)罪人らは義人の集いに。**
6 **誠にエホバの知り給うは義人の道、(1)悪き者らの道は亡びる。**

〔第1篇註〕
(1)「レシャイーム」＝悪き者ら、「ハッタイーム」＝罪人ら、「レーツィーム」＝嘲る者ら、すべて複数形なるに反し「幸なるかな斯かる人」は単数である。義者

が常に悪者よりも少数、否、時に独りであると云う事実をよみとって可なりと考える。第4節にはこの第1節の「者ら」をうけて、「かの悪き者ら」と謂っている。但し5、6節の「ツァディーキーム」＝義人は複数形である。

1節：接続詞（そして）は時に訳し、時に訳さず、日本文の語調、語勢の上から訳さざる場合が却って原文に忠実（その文勢の上から、形式の上からではない）なことがある。第1節の「ウ（そして）」は「道にも」「座にも」の「も」と訳出して見た。

2節：「ではなくして」、……にこそと訳せり。

3節：「その期にあたって」であるが、かかる場合「期あってか」等と訳すのは文勢の上からであって、この辺が自由訳の自由訳たるところでもある。「されば」すべて（と強く）。

4節：「否むしろ」と訳すとやや藪から棒式の感がある。何となればこの語は前段の義人の栄光ある道に対して、内容的に受けているからである。

5節：(されば）は強い therefore(接続詞)。ギリシア語の「ウーン」に該当する。

6節：(接続詞、……ということ）＝dann、for「何となれば」ではどうもしっくりしない。「誠に」と訳す。その意は「それと云うのは本当に……なのだから」と云う原文の気持があるからである。そしてこの（接続詞、……ということ）がwirklich 本当に、まことにと訳され得る場合がかなり多い故である。

＊

第2篇

1 **何故に国人らは立ち集い、民族らは空しきを謀うのか。**
2 **地の王たちは立ち構え、群伯は相議り、**
　エホバとその受膏者とに反って言う、
3 **「打ち砕こう彼らの械を、棄て去ろうその縄を」と。**
4 **天に坐し給う者笑い、主は彼らを嘲り給う。**
5 **やがて彼は彼らを怒りてもの言い、憤りてなやまし給うには、**
6 **「さわれ我はわが王を立てた、わが聖きシオンの山に」と。**
7 **私は述べようエホバの詔命を、**
　彼は私に言い給う「汝はわが子、われは今日汝を生んだ。
8 **我れに求めよ、国々を与る汝が嗣業として、地の極は之を汝が有として。**
9 **汝は鉄の杖で彼らを打ち破り、陶工の器のように彼らを砕こう」。**
10 **さればいざ王らよ賢かれ、教訓をうけよ地の審士輩。**
11 **畏れてエホバに仕え、戦きて歓べ、子に接吻せよ、**
12 **〔子に接吻せよ〕恐らくは彼怒り、汝らは途に亡びよう、その怒はすぐ燃え**
たつゆえに。
　幸なるかな、すべて彼に依頼む者！

〔第2篇註〕

第3節：原文には勿論引用符はないが、内容から付けることにした。以下之に殉ずる。直訳すれば「我々は打ち砕こう」であるけれども、日本語では「我々は」は不要である。つけては不自然である。それ故、かかる種類の代名詞やその他小さな語（particles など）は時につけ、時につけず。

第4節：「天に」は原語は「諸天に」である。

第5節：（接続詞）＝ Then である。

第6節：この（接続詞）は単なる and ではなく（and）yet「さはれ」である。

第7、8節：言の順序はなるべく原文の通りにしたいけれども、日本文としてあまりよみにくい様なときは勿論日本文の法則にしたがう。さりとて散文的にはしたくないから（原文は詩）なるべく原文の調子に従わんとする。そこで語の順序はある一定の法則にしたがうわけにゆかぬ。その句その句について最もよいと思う次序に従うより外ない。それがまた自由訳の特徴でもあろうか。ただしかし断じて意訳ではない。さりとてまた逐語逐字訳でもない。

第10節：（接続詞）＝されば（and）いざ（now）と訳す。

第11節：原文では「子に接吻せよ」が11節に入って三つおりかさねて言い表わしている。この方がいいと思う。

第12節：「おそらくは……」前節の三句全体を受ける。「……の故に」この理由は内容的に前句にかかるので形式の上からは不自然である。「おそらくは……」以下が11節を受けているから。こんな例はヘブライ語にはかなりある故だ。

＊

第3篇

ダビデのうた、その子アブサロムから遁れたときに。

1 エホバよ、何と増し加わることですか私の仇は、多くの者が起こります私に向かって。

2 多くの者がわが魂に就いて言いますには「神の救は彼にない」と。（セラ）

3 けれども、エホバよ、貴神は私を囲む楯、私の栄光、わが首を抬げたもう方。

4 わが声でエホバに叫わるのだ私は、彼は応え給うその聖き山から。（セラ）

5 私は臥した、私は眠った、私は起きた、それはエホバが私を支えて下さるからだ。

6 私は怖れぬ、千万の者が私をとり囲んで立ちかまえるとも。

7 起きて下さい、エホバよ、救って下さい神様！

貴神はわがすべての敵の頬骨を撃ち、悪い奴らの歯を砕いたではありませんか。

8 **エホバにこそ救はある、汝（あなた）の民にどうか汝の祝福（さいわい）がありますように。（セラ）**

〔第3篇註〕

原文（題本の）では「ダビデのうた……」の見出しが第1節となっている（以下すべて如之）。それ故に全体は9節から成っている。これに従って節をわかつと日本訳（英訳）〔独訳 Luthers Übersetzung は原文通り〕の聖書と節が一致しないため、且つはまた、かかる見出しを1節と見なして本文同様にとりあつかうのは賛成しかねる故に（むしろこの故の理由のために）従来の日本訳通りに節をわけた。ただしかし内部におけるわけ方には時々原文に従わねばならぬことも出来て来ようと思う。2篇の12節の「子に接吻せよ」は11節の終りの一句と見た方がいい例の如き。

第1節：(JHWH)「ヤーヴェ」が真相に近いとは思うけれども、従来通り「エホバ」と訳しておく。

第3節：(接続詞) は「けれども」。

第4節：I cried unto Jahve with my voice. (Delitzsch)

Laut rufe ich zu Jahwe. (Bertholet)

Laut rief ich zu Jahwe. (C. Kautzsch)

「私の声」と云う意。Delitzsch は之を副詞と見「私の声で」となし、Bertholet と Kautzsch とは更にそれを内容からくんで laut（大声で）となした。私はこれを「わが声よ」と自分の声によびかけて「さぁ叫ぼう！」と云った心の動きを想像したくもある。しかしこの解釈の仕方は何人もやっていない様だからしばらくここに措き、今は“with my voice”に従おうと思う。Kautzsch、Delitzsch 共に之を過去に訳しているが之は Bertholet の如く現在がいい様に思う。単なる過去の経験ではなく、「いつも叫わるときには聞いて下さるのだ」と云う確信の声だと思う。

第6節：because of myriads of…「多きの故に……」

第8節：前半は独白的詩調。後半は明らかに神へのいのり。

＊

第4篇

伶長（うたのかみ）をして琴に合わせて、ダビデの歌。

1 **叫（よば）わるときに答えて下さい、わが義の神様、困った時にあなたは居場（いば）を（私に）作って下さいました、お憐（あわれ）み下さい　祈りをお聞き下さい。**

2 **人の子らよ！　何時（いつ）までわが栄を恥に、何時まで汝らは虚（むな）しきを愛（この）み、偽（いつわ）りを慕うのか。**　（セラ）

3 **だが知れ、エホバは義人を別ちて己の属（もの）とし給うたことを、エホバは聴き給う彼に私が呼わるときに。**

4 **憤（いか）れよ、だが罪を犯してはならぬ、汝ら臥床（ふしど）にて己が心の衷（うち）に語って黙せ。（セラ）**

5 献げよ義の祭物を、依頼めエホバに。
6 多くの人は言う「誰が嘉き事を我らに見せよう」と。聖顔の光を我らの上に掲げて下さい　エホバよ。
7 あなたは私の心に歓喜を与え給うたのです、彼らの穀物や新酒が豊かであった時よりも更に多く。
8 全く安らかに私は臥しまた眠ります、それは汝が、エホバよ、
私を独りで平安に処らしめ給うからです。

〔第4篇註〕
第1節：「私をおあわれみ下さい」であり、「私のいのりをおきき下さい」であるけれども、「私、私」と日本語に訳出すると「私」が強くひびきすぎる。ある場合にはなくてならぬが、この場合それほどにまで訳出する要なしと考える。原文ではこの節は一片である。かかる場合、一字さげて次行にうつす（以下準之）。
第4節：tremble、zittern（震える）の意と、to be angry、zornig sein（憤る）の意とある。後者に解した。「汝ら憤れよ」の意。（接続詞、そして）は「だが」。

＊

第5篇
伶長により琴に合わせて、ダビデの歌。
1 ああエホバよ、私の言をお聴き下さい、顧みて下さい私の思念を。
2 留意して下さい私の叫ぶ声に、わが王、わが神よ。〔汝にこそ私は祈るのです。〕
汝にこそ（私は）祈るのです。
3 エホバよ、朝にあなたは私の声を聴いて下さい。
朝、あなたに備えして私は俟望みます。
4 汝は悪いことを喜び給う神ではございません、悪はあなたの側に宿ることが出来ません。
5 驕る者はあなたの眼の前に居ることが出来ません。
6 あなたは憎み賜います、すべて邪悪を行うものを。
6 汝は滅ぼし給う虚偽を言うものを。
血を流す男と欺瞞る奴とをエホバは憎み給う。
7 けれども私はあなたの豊かなる恩恵によって参ります　あなたの家に。
あなたを畏れてその聖殿に向かって私は拝します。
8 ああエホバよ、私をお引き入れ下さい、汝の義の中へ、私には敵が居るのです。
汝の道を真直にして下さい　どうか私の前に。

9 誠に彼らの口に真実はなく、その衷は荒び、
その喉はあばける墓、その舌を彼らは滑らかにします。
10 彼らを罪に陥れ給え神よ、彼らが己の謀略によって倒れんことを。
彼らを多くの愆の故に追放して下さい、彼らは汝に背いたのですから。
11 けれども汝に遁げゆく者は喜び、永遠に歓喜び叫わりますように。
汝は彼らを庇い給う、かくて聖名を愛する者が汝にあって歓びますように。
12 エホバよ、誠に汝は義しき者を幸し、楯のように恩恵を以て之を囲みたまいます。

〔第5篇註〕
第1節：「エホバよ」この呼び掛けは第3字目に位置しているが日本語の語調の上から冒頭に置く。しかも嘆詞「ああ」を添えた。呼称の場合、かかる詞を付して訳するを自然とするときは付することとする。
第2節：原文では韻文の切目の都合上、第3節の頭にきている。節の区分に関わりはない。
第5節：（接続詞）はこの場合、「何となれば」の意と思うが邦訳にそのまま新たにすのは却って原文の力を削ぐ所以であると思うから訳さない。
第6節：第5節の後半に付して始まっている。それは第5節後半と対句形をなしているからである。「血を流す男」と訳した。
第8節：「どうか」と云う語は原文にはないが文勢上挿入する。かかる場合はなお出て来るであろう。
第10節：「……たまえ」「……ことを」「……ください」と云う様な語の使いわけは文字の上からではなく、語勢、文勢から自然に出づるままに用いたいと思う。訳文はかくして時に文語調を変え、時にやや長く散文的にもなろう。その訳文はしかし大方いのりの言（口語）を以て表わされる。原文の詩調が、語数が増すために、害われるのはやむを得ない。しかし出来るだけ語数を少なく訳さねばならぬ。全体としてはどこまでも詩的であらねばならない。何となれば詩は散文を以て訳されては詩の本質にもとるからである。

＊

われ霊魂を汝の聖手に託ぬ、
エホバ真理の神よ、
汝は我を贖い給えり。

――詩篇第31篇5節

＊

（附）　ヘブライ語と私

１９２６年の春、帝大独文科に入学した時、私はラテン、ギリシヤ、ヘブライの古典語の中何れを選択科目の一つとして数えんかと考えた。迷える私を呼ぶものはヘブライ預言者の声であった。しかしながら力弱き私は幾度佇んでは行手の険しきに恐れ戦いたろう。それにもかかわらず、野に呼ばわる人の声を私の耳は欺いてはならなかった。今もなお思い起こす、石橋智信教授がイスラエル文化史を講じてエレミヤの預言に来たるや、私の眼にあつきものが湧き出でしことを。その夏ヘブライ語は一日も私を離れなかった。母からやっと戴いた大金をポケットに入れて古本屋の高い棚からあの大きなヘブライ語のレクシコンを卸し得た時の歓びを知るものはわが神のみである。それは恰も私のために備えられたる字引であったかの如く発見されたのである。(1)エホバ・エレである。旧約に親しみが増してゆくのは藤井武先生のお陰であったことは言うまでもない。ある力、ある熱が私を曳っぱりまた燃やしてくれるのでなくしてかかる語が学べるものではなかろう。事実が証明した。十指に余りし始めの聴講者は終にすべてその影を消してしまった。信仰は勉学の力であることは我々の実験の示してくれるところである。藤井先生がいのりを以て日曜の午後一年間御指導下さったこの語学の勉強はまた大いなる助けとなった。顧みれば、はや始めてから六年に余るけれども、おのが学力の微々たるを恥ずるばかりである。しかしヘブライ語は私の「初めの愛」である。どうして之を棄てることが出来よう。神、我れを助け給え！

(1)**エホバ見給わん、エホバ備え給わん。**　**創世記22・14**

＊

「いのり（1）」

1．いのり以前の問題

さびしきは人である。なぜであろうか。原人アダムが神に創られし当初、

「神御自身の像の如く」（創世1・27）

であったが、彼が単独であったのは人間の創造の過程における暫しの間であるに過ぎなかった。単独なるアダムの存在、一個としての人間の存在は、人格者としての意義をなさぬものであるらしくあった。神は之を見て言い給うた、

「人独りなるは善からず、我彼に適う助者を彼のために造らん」（創世2・18）

と。人は神の如く創られたる最高の栄誉を負いながら、神の如く独りあることが出来ないところに、創られた者らしさがあるのである。神といえども数理的絶対の個ではない。

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」（ヨハネ1・1）

と言われる神は、その独子キリストと共に「世の創めの先きに」在り給いし神である。キリストは、

「父の懐にいます独子」（ヨハネ1・18）

で在り給う程に父と一つであった。聖書に啓示されている神は、かの形而上学的の神ではなくして、此くの如き人格的の神である。けれども神は神であって、その独在の内容は人の思いを越ゆる深きものである。何人も神のこの絶対をさぐり知ることは出来ない。人はその原始において既に相対的なるものに創られたのである。人は助くる者を要すべく創られた。呼びかくべき他なる者なくしては在り得ぬさびしさを神は善しとは見給わなかったのである。このことはしかし、人の価値が相対的なものであると云うことを意味するものではない。アダムよりエバが、男（イーシュ）より女（イッシャー）が出たことを人格の問題から考えるならば、人格は相対的形式のもとに存立することを意味するものである。人がもし絶対に個なる存在であるならば、個性は認めらるべくもない。個性が個性たるを得んためには、個性は他の個性の対立を必然的に予想し要求するものである。個性あっての人格であって、個性なき人格は考えられない。かく考えれば、さびしさは人格の一特徴であらねばならない。然らばさびしさを宿すアダムは助者エバを得て、満ち足りたであろうか。彼らの人格はもはや何ら求むるところなき全き自足のものであり得たろうか。アダムにもエバにも未だ罪はなかった。しかしアダムが独りあることが善くないと同様にエバも独り有ることの不適であるは言うまでもない。アダムにさびしさがあるならば、エバにもまたさびしさがあらねばならぬ。一個なるアダムが複数の存在となって人格の存立は得たけれども、神は一度善しと見給うて創造の手を休め給うたけれども（創世2・1～3）、それにて神は人間と万物をそのなすがままに任せ給うたのではなかった。神は創りし者であり、人と万物とは創られたるものであった。つくられたものがどうしてなおも創造主からいのちを仰ぐことなくして存在し得るであろうか。泉から迸りたる水がどうしてそのまま泉であることを得るであろうか。かくて思うに、人のさびしさはその最も深き要求においてはいのちを慕うさびしさではないか。アダムがエバを要するさびしさはなお本源的なるものとは云えない。さびしさは断じて感傷ではない。永遠の生命を求むる心、人間のいのちそのものの要求、誠にいのちはいのちを要むるのである。

「ああ神よ、鹿の渓水をしたい喘ぐが如く、わが霊魂も汝を慕いあえぐなり」（詩42・1）

之より本質的要求はあり得ないはずである。いのちがいのちであり得んがための形式が相対であるのならば、動植物もまた然るべきはずであり、また事実彼らも相対の生を営んでいる。しかし人間のいのちはその生物的存在にあるよりも先ず、人格的存在にある。

「エホバ神土の塵を以て人を造り生命の気をその鼻に吹き入れまつり、人即ち生霊となりぬ」（創世2・7）

とあるは何を物語るか。人が神と霊的交わりの中にあるべきを意味するのでなくして何であろうか。神の霊を授けられたる人が神を離れて霊的、人格的存在たるを得ざるはあまりにも自明のことである。神との霊的交通こそは人格者の存在の第一原理であらねばならぬ。さびしさはこのいのちを慕うさびしさであり、永遠の生命とはこの神のいのちを措いて何処に求めらるべきいのちであるか。

暫くここに問題の主題を離れて、神が人を土から創りこれに生命の気を吹き入れ給うたと云う記事について考えて見たいと思う。これは当面の問題とはならないにしても、立場を明らかにし我々の論を進めるに当たって一つの重大なる隅の首石たる役目を果たしてくれるであろうから。創世記第2章はその第4節後半から所謂ヤーヴィスト（J）の筆に成る創造の記事とされていて、第1章の雄健なる筆致と壮大なる内容に比してこれは如何にも素朴であり物語風である。然らば我々はこの記事を一幅の絵画的神話として宗教学的にこれを解するにとどめ、歴史的事実と見るは不当のことであろうか。それは真理に背くことであろうか。それが歴史的事実であると考古学的に実証することは恐らく不可能のことに属する。けれども事実なるか否かの前に真理がここにありや否やの問題を考究することが大切である。真理、換言せば価値を有せざる事実は事実であっても我々には関わりなきものとなる故に、この記事に真理を我々が発見し得るかを以て我々の態度を明らかにせねばならぬ。

神が土から人を創ったと云うことは人の存在の半面である生物的存在であることを意味するものである。これに神が鼻より生命の気を吹き込み給うたと云うは、人の霊的存在たるを明らかにするものである。此く人は二元的の存在である。しかも、はじめに霊があって後に肉があったのではなく、肉の土台に霊が備えられたのである。此く言えば現代のマルクス主義を奉ずる者、及び享楽主義を謳歌する輩は、採って以て自己弁護の資に供するかも知れぬ。しかしながら思え、創造の段階を。下等なものより漸次に高等なる生物へと創造の業の進行せし過程を。肉が始めに据えられ霊によってそれが完成するは余りにも当然の帰結ではないか。聖書は後にキリスト出現の奥義を記すところに、

「血気の体にて播かれ、霊の体に甦らせられん。血気の体ある如く、また霊の体あり。録して始めの人アダムは活ける者となれりとあるが如し。而して終りのアダムは、生命を与うる霊となれり。霊のものは前にあらず、反って血気のもの前にありて霊のもの後にあり。」（コリント前15・44～46）

と云っている。霊は肉を支配せんために後に現れたのである。霊が肉を支配すると云うことは、論理的には霊が肉より先行すると云うことを意味する。人が生ける者となったのは神の気によってである限り、人間のいのちの問題は肉に関わるのではなくして、神の気即ち霊に関われねばならぬ。されば論者は重ねて言う、人は先ず霊の存在であることを。神の気が肉であるというならば、神のいのちが肉であると云うならば、即ち已む。論者はか

かる生物的、物質的人間とあげつらうを恥じとし不可能と考える。豚の如き人々をして豚の価値を論ぜしめよ。人はまことのいのち、霊のことを問題とすべきものである。

「まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらのものは汝らに加えらるべし」（マタイ6・33）

とはイエスの重き一言であった。

かく観じ来たれば、創世記第2章の人の創造の記事がいかに真理を物語るかを知る。我々が此くも速やかにこれを真理と断定するのを人々はあやしむであろう。それは当然である。我々も如上の論を以て真理を論証したとは考えない。しかしながら我々の論は論理を超えた確かさに基づいて進んでいるのである。その確かさの基とは何か。一言にして言うならば第二のアダムの霊である。されば我々は創世記第2章の記事を真理と見、真理と見る限り、我々はその事実性を信ぜざるを得ない。ただしかし、そこに表現せられたる文字通りに事実がありしか否かの如きは問題とならない。そは文字を儀文と化せしめるものであって、霊はその文字を活かして読むべきであるからである。聖書はどこまでも細密に研究し解剖されて可い、しかし文字の末に拘泥するものは竟に聖書を読み損なう所以である。キリストもパウロも聖書（旧約）を読むにはただ霊と真実とを以てしたのであった。

さて、我らは再び問題の本道に立ち帰らねばならぬ。相対の中に人格の存立を得たところの二人の原人は、人格の本来の要求として絶対的人格者神を求めねば居られないのであった。それを私はさびしさと称して来た。アダムとエバが相互を要むるさびしさよりも本質的なるさびしさとして神を求むるさびしさに人の生命の生命たる所以があることを見た。ただしかし罪を犯さざりし時のアダムとエバに於てはこのさびしさは意識されては居なかったであろう。自覚にはのぼって居らなかったであろう。何となれば罪を知らざりし時の彼らの生活意識は余りにも新鮮なるあるがままなる生活そのものに溶け込んで居たであろうから。彼らが生くることはさながらに求むることと一如であって、さびしさはさびしさとして感ぜられては居なかったであろう。彼らの自由意思が一たび乱用されざりし間は、彼ら相互の会話、神への祈祷、讃美は何と祝福されたものであったろう。詩人ミルトンの想像は断じて詩的空想ではなくして、あるべくしてありし人の生活の真実なる表現である。

翻って我々は今ある現実の我々の状態を考察しなければならない。ここにもまたさびしさの要求を見る、潜在的に或いは顕在的に、そはあまりにも著しき現実の姿であらぬか。赤児の泣く声に我々は何を聴くか。赤児は己が空腹や母の不在等を意識するや、ただ泣きに泣くのである。彼らにも意思の衝動はある。彼らは意思表示の形式として未だ言語を有せざるも、泣くことは正しく彼らの唯一の意思表示であり、言である。泣く声は音ではあっても、泣き声自体ではそれが何を意味するかを何人も知る由もないけれども、その直接にして切実なる声は、母親の心にせまり、赤児が何を求むるかを直覚せしめんとする。我々はこの事実を見遁してはならない。即ち赤児の泣くは、全身全霊のわざであって、いのち

そのもののさびしさの要求に根ざしていることを。かくも原始的なる赤児の泣くことそのことに、いのり以前のいのりがあるのではないか。いのりの本質的なものが胚種として存在しているのではないか。然らばその本質的なるものとは何であろうか。そはいのちのさびしさのまことの願望である。赤児の泣くは遊びごとではない、いのちがけの求めである。まことなる願望である。而してこのまことの願いは、その対象として必然、少なくとも主観的にはまことなるもの、換言せば全幅の信頼をなげかけ得るものであらねばならぬ。赤児の場合に於ては、この対象は母親である。

斯く言の始めが赤児の泣く声にあり、赤児の泣くのがいのり以前のいのりであるならば、言はその本来の使命としていのりのために生じたものではあらぬか。神の気によって生けるものと成りし人間が、永遠の生命を求めての神との人格的交わりに、人間の自由なる意思表示として、正に言の使命の本来なるものがあるのである。然るをこの本来なる交わりを人はいつしか忘れて、人と人との交わりにのみ言の存在する意義あるかの如くにしてしまった。人間生活の実相を見よ！　全人格のまことの意思表示がどれほどであるか。純粋なるべき言はどれほど純粋さを有っているか。泣く赤児の声のみが純粋であるのか、片言混じりにもの言う幼児のみがおのずからなるまことの言を語るばかりか。さりとはあまりにも悲しむべき現状である。

「誠にかれらの口には真実なく、その衷は荒び、その喉はあばける墓、その舌を彼らは滑らかにする」（詩篇５・９）

のである。彼らはまことの言を失ってしまったのであるか。まことの言の隠れたる深い泉であるところの一つのさびしさの要求は、いのちの願いは人には失せてしまったのか。否そうではあるまい。たとい、われはさびしからずと言う人ありとも、その人はさびしさの何たるかを知らぬものであるにすぎない。白痴、狂人の如き誠にあわれむべき人々であらざる限り、人はさびしさを自覚すべきはずのものである。さびしさは人である。さればこそ人は語らずには居られぬのである。語るけれども語る言にいつわりの刺が宿り、語るけれどもその語らいによっては満たされざる坑あるはどうしたわけであろうか。彼らは友を求めて、見えては胸襟を打ち開きて語らい、別れては書信を以て相慰めんとする。そは美わしきことである。けれどもそれにて坑は満たされたであろうか。否、さびしさはどこまでも人を追う。人は竟に人の心を全く満たしてくれないのか。否、人と語ればさびしさはいや増しゆかんとするか。然らば我は我が心に自語するの外なしとなし、或いは独語体の日記をつづり、或いは詩文を草して、独り鬱を封じ義憤を燃やし、さびしさをかこつのである。ここに魂はよりいつわりなき姿に帰り、言はより純粋なる形をとる。これまた美しきことである。しかしながらこれのみにては、なお一つのものを欠く。人に語るも、己れと語るも、さびしさはなおつきまとう。これらの試みは、それがいかなる形に表されようとも、われらの言が人か己れにのみ向けられている限り、

(1)「**見よ、すべて空にして、風を喰うものなり**」**（伝道之書1・14）**

(1)「風を捕うるが如し」では訳が弱い。「風を喰う」である。

である。人はいつまで風を喰いて生きんとするのであるか。霊魂は痩せ細らざるを得ようか。しかし上述のたぐいの人は、兎まれ義しき道を辿っているのである。相対の世界から絶対の世界に進まんとの動向を取っているのである。

(2)「善き人は暗中の模索にあっても義しき道をよく識っている」

(2)"Ein guter Mensch, in seinem dunkeln Drange,
Ist sich des rechten Weges wohl bewußt."（Goethe : Faust 328-329）

のであろう。けれどもあの、

(3)「はてさて、己は哲学も法学も医学もあらずもがなの神学も熱心に勉強して、底の底まで研究した」（森鴎外氏訳）

(3)"Habe nun, ach! Philosophie,
Juristerey und Medicin,
Und leider auch Theologie!
Durchaus studirt, mit heißem Bemühn."（Goethe : Faust 354-357）

と云うファウストが如何に衷に訴え、外に捜るとも、ある一つの門を見出して上に昇る道を発見するのでなくしては、さびしさは満たされず、渇きは癒されないのである。ある人がオランダに入りて嘆いて、

(4)「水、水はいたるところに、さわれ一滴の飲むべきぞなき」

(4)"Water, water, everywhere, but not a drop to drink"

と言ったとか中学の英語の教科書で学んだことを思い起こすのであるが、己れをめぐりて人はあれども訴うべきの人はなく、わが衷に呼びかくるべき心はあれど、さびしさは我と我が身を喰わんのみ。ここに於てか、多くの人は自らの声をごまかして安価なる楽天主義に身を売り、ある者は砂の上にうち築かれたる処世道徳の城に立て籠りて自らを安しとなし、ある者は勇敢にも空中に楼閣をうち立てて、(5)超人の哲学に魂を狂わせ、ある者は世をはかなみて山に遁れ或いは自らその身を害い果てる。

(5) Friedrich Wilhelm Nietzsche（ニーチェ）の輩を指す。

之すべて人のいかに弱き者なるかを実証するものでなくて何であろう。さびしさは厳として一つの実在である。

文化を好むところの近代人は、かのデルフォイのアポルオンの神殿の壁にある無名の手が記したと云う有名なる一語

(6)「汝自らを知れ」

(6)γνωθι σεαυτον（グノーティ・セアウトン）、

英 Know thyself　独 Erkenne sich selbst.

を須らくわが問題として真剣に考うべきである。そのためには談話も書簡も感想も日記も

すべてを一度うち棄てて、然り、おのがペンをなげうち、おのが唇を固く緘して、しずけき人影なき森の陰、野の隅に出で、わが身も魂もほうりだして見よ。汝は、否、私はそこに黒き己が姿を見たのである。さびしさの要求が正しき要求として求められんためには、どうしても通らねばならぬ門を発見したのである。

然るに同じく野に出でて、ある人々は直ちに自然と語った。彼らは人の語らざる言を自然から聞くものの如く感じた。沈黙の自然には偉大なる言が蔵せられているのを知った。彼らはこの神秘的なる声を聞いて、或いは己が心を魅する如き自然のささやきに慰められて自然の前に拝跪した。彼らはやがて自然に於て神を見ると悟った。この神と融合せんと彼らの心は奇しくも昇ってゆく。神即自然、自然即我との方式のもとに彼らの切なるねがいは満たされ、さびしさは医されてゆくが如くである。宇宙心と融合せんとする驚くべき希求である。彼らはやがて神となるであろう。自然と人との交わりに於けるこの種の体験に深き消息あるを我らは知る。しかしながらあやまってはならぬ。こは畢竟、己れを神にまで高めてしまうところの悪霊的（デーモーニッシュ）の魂の衝動から生ずるものである。ヨハネの言うところの迷謬の霊（ヨハネ第一書４・６）に外ならぬ。サタンの世界にてはこれが救いであり、之より深き真理はなく、これこそは文化人の最高の姿であろう。

(7)「我は基督なり」

(7)"Ich bin Christus."

とまで叫んだルッターの真理の霊（同上）と似て非なるものにして此くの如きはない。一つは小我を純化して育てつつ大我に至ると云い、他は己れを否定し殺してしまうと云うにある。カトリック教、及び単なる理想主義的思想は前者の方向をとり、真のプロテスタント主義のみ後者である。

然らば黒き姿を発見した者の潜らねばならぬ門には何と示されてあるのか。詩人ダンテがいみじくも告げてくれる。

"Per me si va ne la città dolente,
per me si va ne l'etterno dolore,
per me si va tra la perduta gente.
Giustizia mosse il mio alto fattore;
fecemi la divina podestate,
la somma sapienza e 'l primo amore.
Dinanzi a me non fuor cose create
se non etterne, e io etterno duro.
Lasciate ogne speranza, voi ch'entrate."

Inferno: Canto 3,1-9

「我を過ぎて憂愁の都へ
我を過ぎて永劫の憂苦へ
我を過ぎて亡滅の民のうちへ
正義わが高き造主を動かし
神の力、至高の智慧
また本原の愛我を造れり
永劫のもののほか我より前に
造られてしものなく、我は又永劫に続く。
一切の希望を棄てよ、汝らここに入る者。」

（『神曲』地獄篇、第3曲冒頭、中山昌樹氏訳）

此くの如き死の国へ一たび降らねばならぬのが黒き影の運命である。当然の果である。黒き影とは何か。言うまでもなき罪！　罪の実在を発見したことは悲しみの極みである。何となればそは肉体の死のみならず、それよりも遥かに重大なる霊魂の死をその果として結ぶからである。

「死の刺（はり）は罪なり。罪の力は律法（おきて）なり」（コリント前書15・56）

であり、「律法は霊なるもの」であるからである。

⑻**「ああわれ悩める人なるかな、此の死の体（からだ）より我を救わん者は誰ぞ」（パウロ、ロマ7・24）**

⑻ロマ書に於けるこの告白は救われたるパウロの声ではあるが。

と心から発せざるを得ざる人となったとき、彼は本当のさびしさを知り、求むべき対象が外にも内にも絶対になく、ただ上にあることを発見したのである。彼のさびしさの要求は、いのちの願望は確かに義しき路に来た。罪の自覚がいのりへの出発点であり、死の門がいのりの本界への入口であることを知った。

アダム、エバは自ら罪を犯さざりし時、彼らのさびしさの要求、いのちのねがいはまことのいのりとして直ちに神に向けられていた。彼らはそのさびしさをすら自覚することなしに。楽園とはかかる、⑼存在（あり）と当意（べし）との一致せる世界であった。

⑼ Sein und Sollen, to" be" and "aught" to be.

然るに自由意思の大過によって彼らは楽園を追われた。人々は迷いて神を求むる心、いのりの心を喪失した。ただ罪に泣くまことの魂のみが神にいのることをなし得た。正しき道に於てされざるいのりもいのりであると云うのであるならば、鰯（いわし）の頭を拝するいのりから、木石を拝むいのり、拝金、拝健、等々拝大自然に至るまで、偶像崇拝のいのりは枚挙に遑（いとま）なかるべく、いのりに就いて論ずるは無用のわざであろう。ああ、人の心の渦は何を求めているのか！

「エホバ天より人の子をのぞみて
悟る者神を尋ぬる者ありやと見給いしに、
みな逆（そむ）きいでて悉（ことごと）く腐れたり。
善をなすものなし一人だになし。」（詩篇第14篇3節）

＊

「眠りなき夜のため」上巻（1） ヒルティー原著

Carl Hilty : Für schlaflose Nächte, I .Teil, 1919.

10月6日

基督教はつねにそれ自体全く健全なるものであらねばならぬ。かくて半は治癒を求めつつ、半は手足纏いとなりつつ、絶えず基督教に推し迫って来る凡ての不健全にして病的なるものを征服し得ねばならない。

そのことが本当に、キリストがあのようにしばしば彼の弟子らを避け給うて、ひとり山にあって新しき力ぞえを希求め給わねばならなかった理由であったのだろう。

精神的に特に不健康なる人々の群が、つねに犇めき集うところの形式的「祈祷治療院」に至っては、なおさらのこと道に悖れるものである。此くの如きをつづけて永きに亘るならば、何人と雖も害を蒙るに至る。

10月7日

人一たび全く愛の国土に踏み入るや、此の世は、かくも欠けたるものながら、なお且つ美わしくまた豊けくなるのである。この世はげに愛のための機会のみから成り立っているからである。

10月16日

＊信実〔独 Treue、英 Truth〕は実に最も美わしく、最も重要なる性質である。信実は動物をすら高めて、それを有する動物をして殆ど人間的価値と尊厳にまで昇らしめる。一方この信実を全く欠くときには、才気が如何に満ち、教養が如何に高き人と雖も、そは危険なる獣にすぎない。

＊「信実」〔トロイエ（独）、ツルース（英）〕はなお真実、忠実、貞節などと訳され得る。カントの所謂「善意志」である。「善意志」は哲学的に厳密に考えられたる概念であるが、常識的には「信実」と云われる。

10月21日

ヨブ記参照。概要。ヨブが何人よりも先ず内心の平安を得たのは、彼が如何なる状態に立ちいたるとも神を友として硬く保持せんと決意するに至ったからである。しかしこの決意を彼は、自ら神を見奉るに先だち、なお全く信仰に於てなさねばならなかった。然らずんば彼は己れの苦艱から害なくして脱することは出来なかったであろう。かくて彼はたとい彼が目を以て見ずとも、世界の全統御に於ける神の義を善き人にも悪しき者にももはや疑うてはならなかった。そして彼は最後に己れ自身の苦艱に関しては、神意がここにもまた在ると云うより外に何らの解明を得ずして、その苦艱が神から来たものであり、ともかくも彼の救いになるところの何ものか善なるものであるとなして、これを内的に信受せねばならなかった。神の義に対するこの絶対服従がなさるるや――或る註解者が正当にも言

う如く――

「この試練を経たる忍苦者に対して、神が恩恵を惜しみなく表示されることを妨げる何ものももはや存在しなかったのである。戦いは戦い果たされた。かくて勝利の賞は彼に与えられて不可なかったのである。」

彼を誤解して等閑に付したる人々や、また所謂友人らを義とすることは、神が後ほど救いの内的に高められたる、義とせられたる者〔ヨブ〕に、更につけ加えて備えたもうたのである。彼自らはそのために思い煩うを要しなかった。彼はむしろ、彼らが彼を捜し求め、彼の執り成し（代願）を確かめるように、(l)神が彼らを強い給う如き最も願わしき立場に到達したのであった。彼のこの執り成しなくしては、彼らは神に赦されなかったのである。斯くの如きことは今日もなおしばしば起こるのである。

〔註〕原文にして強めてあるところは圏点にて表わせり。次号もすべて之に準ず。

(l)「エホバ是らの言をヨブに語りたまいて後、エホバ、テマン人エリパズに言いたまいけるは、我なんじと汝の二人の友を怒る。其はなんじらが我に関て言い述べたるところは、わが僕ヨブの言いたることのごとく正当からざればなり。然ば汝ら、牡牛七頭、牡羊七頭を取りてわが僕ヨブに至り、汝らの身のために燔祭を献げよ。わが僕ヨブなんじらのために祈らん。われかれを嘉納べければ之により て汝らの愚を罰せざらん。」（ヨブ記42・7～8）

10月31日

〔１５１７年10月31日、宗教改革記念日〕

ルカ伝第11章36節

「もし汝の全身明るくして暗き所なくば、輝ける灯火に照らさるる如く、その身全く明るからん。」

我らの衷に起こる最善にして決定的なるものは、概していつも電光的性質を有っている。即ちそれはある別の世界から臨む恩恵の一閃であり、光明の一輝であって、大かたはただに一つの洞察であるのみならず、積極的行動への一つの刺激である。そこでこれが決意を同じくすみやかになし、その決意を直ちに実行に移すことは人間にゆだねられたる事柄である。然らずんばこの恩恵の閃光（グナーデンブリック）は消え去ってしまう。我々がこの恩恵の決意を把握するならば、そは金色の翼をもてる鷲あるを知ろう。常ならば越ゆべからざる障害をも越えて我らを力強くも高揚せしめるのである。天国への道は正にこの全く独特なるものであって、学習の普通の法則によって残りなく測定されるような途ではないのである。しかしこのことを経験しないものは、これを信じようとはしないのである。

＊

(l)「最早自己を見まじ、その健康に拝跪すまじと決意した。と同時に私は忽然として元気

付いた。元気づくと同時に、他者の他力は私の上にも、厳として如実なる力であった事を知った。一切が彼の誘導によるものの如くにみえた。」（三谷先生）

(l)は訳者の挿入。真の決意はそれが上から強いられたるもの、不可抗力的神の力であることを経験する。然らざる決意はまことの実行を伴うことが出来ない。まことの意志は天来の意志であって、人の意志の自由は罪の故にすでに失われている。

Laubfall

落葉（らくよう）

I. Der Spätherbst streift durch Berg und Tal;
Die roten Blätter fallen;
Die Vögel schweigen überall
In diesen Waldeshallen.

In kurzem decken Reif und Schnee
Die buntgefärbten Wälder.
Wie sprichst du diesmal sonder Weh:
Ach käm es doch noch bälder?!

Dem eignen Wesen ward ich feind,
Es ist dahingegeben;
Jetzt kommt der Tod, ein ernster Freund,
Nach ihm das Leben.

II. Dein Wille ward mein Wille, auf Unrast folgte Stille,
Der Geist ging ein zur Ruh.
Was los war, ist gebunden, was fehlte, ward gefunden,
Ein Hauch des Lebens spricht mir zu.

1更けゆく秋は山また谷にたゆたい、
木の葉紅（あか）らみては落つ。
鳥は啼かずいずこの隅にも
この森のひろ間の。

やがて霜と雪とはつつむらん
綾（あや）なす杜（もり）を。
如何（いか）にこの度は嗟嘆（なげき）なく汝（な）れは曰う、
「秋の暮などかくは遅く来たりし」。

生まれながらの性（さが）に我は敵となりぬ、
そのものは明け渡されしなり。
今や来ぬ真剣の友なる死、
死ののちにぞ生命（いのち）は来たる。

2汝（な）が意志はわが意志とはなりぬ、
不安は平安（やすき）に。
霊魂（たましい）は平静（やすらい）に入りぬ。
解かれしものは結ばれ、
失われたるは見出されたり、
生命（いのち）の息吹（いぶき）ぞわれにはささやく。」

〔この一篇いかに近日のわが感懐言するものか。……感謝。――訳者〕

＊

「星のたより」（1）

先びとの国ことばにうつせしかを
　知るもまた識らざるも、
われはただ我がみぬちより
　出づる言もて意（こころ）をうつし、
かかるしらべを奏でたるうた人と共に
　うたの翼にのりてその現実を
　　のりこえゆかんと
同じ心の人々と共にせんとねがう。

＊

（其1）

「人生のうた」――ロングフェロー

（米国）（1807.2.27 ～ 1882.3.24）――

"A Psalm of Life" by Henry Wadsworth Longfellow

Tell me not, in mournful numbers,
　Life is but an empty dream!
For the soul is dead that slumbers,
　And things are not what they seem.

Life is real! Life is earnest!
　And the grave is not its goal;
Dust thou art, to dust returnest,
　Was not spoken of the soul.

Not enjoyment, and not sorrow,
　Is our destined end or way;
But to act, that each to-morrow
　Find us farther than to-day.

言う勿れ悲しき調べに、
　『人生（いくる）は槿花（きんか）一朝の夢ー』と。
魂（たま）も睡（まどろ）めば死し、
　見ゆるところは真相（まこと）に非ざれば。

人生（いくる）は真実（まこと）ー　人生（いくる）は厳粛（おごそか）ー
　塋穴（おくつき）いかで終結（おわり）なるらん、
『塵より出でて塵に還る』
　そは 霊（たましい）の謂（いい）にはあらず

楽しみも悲しみも
　わが命数（さだめ）にも道にもあらず、
道は実践にあり、明日（あす）の吾れは
　今日の我れを乗り越えてゆく。

Art is long, and Time is fleeting,
And our hearts, though stout and brave,
Still, like muffled drums, are beating
Funeral marches to the grave.

In the world's broad field of battle,
In the bivouac of Life,
Be not like dumb, driven cattle!
Be a hero in the strife!

Trust no Future, howe'er pleasant!
Let the dead Past bury its dead!
Act,— act in the living Present!
Heart within, and God o'erhead!

Lives of great men all remind us
We can make our lives sublime,
And, departing, leave behind us
Footprints on the sands of time;

Footprints, that perhaps another,
Sailing o'er life's solemn main,

A forlorn and shipwrecked brother,
Seeing, shall take heart again.

Let us, then, be up and doing,
With a heart for any fate;
Still achieving, still pursuing,
Learn to labor and to wait.

芸術は劫く、時代は流る、
われらが心臓はよし堅くして勇ともˊ
音もなき鼓の如くつねに奏つ
墓穴にいたる埋葬の曲を。

この世の戦の広き場にてˊ
人のいのちの露営の野にてˊ
もだしつつ駆らるる牛馬たらざれˊ
戦闘の丈夫たれよ！

楽しかる後の日をたのむ勿れ！
逝きにし死をして死を葬らしめよ！
働け！　働け生ける今！
衷に心あり、上に神あり。

偉人の生涯を想いては
われらが生を崇高になしˊ
離別るるに臨みて我らはあとに
足跡をとどめん、時の砂漠に。

足跡、そはおそらく兄弟のˊ
人の世のおごそかなるわたつみを
漂ゆきし人の。
それを見て寄るべなき難破の者は
再び勇み振い起つらん。

いざ我ら起ちて為しつづけんˊ
すべてに耐うる心もてˊ
愈々達しては愈々求めˊ
働くを学びˊ待つを学ばん。

制作・著作：HP「小池辰雄文庫」　ファイル名：PDF小池羔　作成 2024/09/09　修正 2026/10/24　出力 2026/10/24

（其2）

「矢と歌」――ロングフェロー――

Longfellow : The Arrow and the Song

I shot an arrow into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For, so swiftly it flew, the sight
Could not follow it in its flight.

I breathed a song into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For who has sight so keen and strong,
That it can follow the flight of song?

Long, long afterward, in an oak
I found the arrow, still unbroke;
And the song, from beginning to end,
I found again in the heart of a friend.

われ空に放てり矢を一つ、
そは地に隕ちぬ、何処かは知らず。
いとも疾く飛び去りて、眼の
その跡を趁うべうもなかりけり。

われ空に吹息けり一つの歌を、
そは地に隕ちぬ、何処かは知らず。
誰が眸か鋭くまた強からん
うたの翼に追いしくほどに。

永く永く時を経て、一本の樫に
われは見出でつ、かの矢折れでなおのこれるを。
またかの歌を始めより終りまで
われは見出でぬ一人の友の心にぞ。

〔第一信〕――ある音信より――〔10月18日〕

『いかに塵の世を立ち超えし愛（め）でたさのありて、
今日わが身をば主に近く高むるものか、
ただ人の歩みにささえを築く人ありとせばわざわいなるかな』

「樅の日記」（1）

――１９１８年11月23日～24日――

薔薇の花にそのかおりあるごとく、
この人の心にあるセンスあるらん。

Easter '21.

Likewise the Sprit also helpeth our infirmities:
For we know not what we should pray for as we ought:
But the Spirit itself maketh intercession for us
With groanings which cannot be uttered.

――Romans.VIII.26.――

１９２１ 復活節

斯くのごとく御靈も我らの弱を助けたもう。
我らは如何に祈るべきかを知らざれども、
御靈みずから言い難き歎をもて執成し給う。

――ロマ書第8章26節――

「樅（もみ）」の聖書の栞（しおり）に記されてあるこの聖句にもまして、
「樅」の心をあらすものはなかるべく、その生涯を語るものはなかろう。

「樅の日記より」（1）　序（編者）

〔　〕符は編者の註

聖書と偉大なる書籍とは私の生涯の友であらねばならない。その外に私はここに一つの手離すことの出来ない書き物を有（も）っている。それはこの「樅（もみ）の日記」である。これを繙（ひもと）くごとに私は活ける人の親しき言を聴くの想いである。然り、彼は今も勿論生きている、ここよりはもっといい国に。「清き岸辺に」て相会う日まで信仰によりて語り、共に倶に聖名を讃えつつ前進するであろう。

恩師藤井武先生の、私がここに樅と称える此の人について書かれし文字を、次に記そうとするのであるが、どうか読者よ（もしこの『羔』に読者あらば）、其の箇所を(1)「唯見て過ぎて」いただきたい。

〔註〕(1)ダンテの言

「小池政美君は稀に見る純なる人格であった。私が君を識ったのは僅かに君の地上に於ける生涯の最後の二年間に過ぎない。しかし私にとってその記憶は永久的である。君の人格には或る意味に於てイエスの香いがあった。ガリラヤ湖または橄欖山の如き背景に適わしきものであった。」

「君は或る意味に於て悲哀の人であった。君の信仰はただ感謝々々と叫んでよろこび躍るようなたちのものではなかった。君にはいつも深みがあった。しかしまた深みの中に言いがたい豊かさがあった。……君の〔信仰〕は特に貞潔のそれであったと言いたい。……君は近代人の腐敗しきった情性を遥かに見下して、曙の明星のごとく輝いた。」

「幸なるかな心の純き者、その人は神を見ん」（主イエス）

日記はいのりの心持を以て神の前に我れと我が身に語りつつ書くものである。内容の上からは人を相手とすることは勿論あろうけれども、日記を書き記す事それ自体は絶対に自語独白であって対話ではない故に、独特の世界である。この独特の世界に於ける唯一つの対話者は神あるのみである。それ故に日記に於ては最も純粋なる、あるがままの言を見る。私がここに載せようとするのは日記よりであって全部ではない。

わが樅は自分の日記を私に読まれようとは夢にも思わなかったろう。況して此くの如きことをされようとは。天の樅よ、どうかこの愚を赦してくれ。ただこれが真理の真実なる証しの一つともなるのなら、どうかもう一度私のため犠牲となってくれ。

（１９３２・11・３、編者、残樅生）

＊

「樅の日記」 序

恵み深かりし旅の日を了えて東京に帰ってから既に12日になる。12日の間に世界は全然変わってしまった。新渡戸先生のお辞を借りれば、＊１９１８・11・11午前5時を以てModern age は New age になってしまった。また同じ12日の間に、もうお顔を見ることの出来ない方が我等の身近に起こってしまった。大関先生〔当時地理学界の中堅、輝かしかるべき将来ありし学者、気骨稜々たり、惜しみても余りある人なることを私は兄から聞かされた。〕は１９１８・11・14午後2時北海道釧路で従容と死に就かれた。一は喜である、一は悲である。

喜は世界の喜であり、悲は自分一人の悲にとどまる。しかし何(いず)れも大いなる出来事であった。忘れられぬ出来事である。……12日の怠慢は明瞭なる12日の怠慢としておきたいと思う。なるべくはこんなブランク〔白紙〕はもう欲しくないものである。毎日毎日を規則正しく暮らして行けば日記をつける時間はあり相なものではないか。

＊〔文庫編者註〕第一次世界大戦（1914/7/28～1918/11/11)、１９１８年11月11日午前6時、ドイツは連合国との休戦協定に調印。同日午前11時、発効〕。

――１９１８年11月23日

……スケヂュール〔schedule 表、箇条書き〕にまとめて見ると大いなる出来事は大関先生の御逝去と世界平和とである。注意すべき事は内村先生の講義である。三つの事は明白にかかねばならぬ。小さな事としては腫物のあとしまつ、桐法会〔高師附属中学出身者にして帝大法科を卒業したる者の会〕、ピクニックがある

――11月23日

＊

○１９１８年11月23日（新嘗祭）

昨夜は晩(おそ)かった、寝たのは2時であった。但しそのお陰で三十頁の行政がすんだのであった。今日はまたまたそのお陰で目の覚めたのは8時すぎ。……おば様は御快諾下さった、空は本当に美しかった。水は昨夜の雨で大分汚れて居たけれども量は大かった。土の黒さと生き生きした大根の緑とが美しかった。小さな楔林(くぬぎ)もよかった。何も彼も実に美わしかった。よき三時間の散歩をして帰る。

帰ると〔○○〕さんが来ていた。何となくふさぎ込むが故にやって来たと云って居た。僕の心は何故か普段の親切に帰る事が出来なかった。恐らくは思う程の Hilarity(ヒラリティー)〔陽気、愉快〕を得られずに○○さんは帰った事だろうと思う。少し気の毒なという気がする。気の毒と云えば○○さんはスリー・ホームス〔「三家庭」と云う有名な家庭小説〕の中、マーチン・アラーバイ〔Martin Allerby〕が一番好きの様である。人間の眼には幸福に見えるかも知れぬ。ただ僕はラルフ・ダグラス〔Ralph Douglas〕が好きである。試練を経て来ているという事も一因かも知れない。しかしその外にも何ものかが僕を引きつける。〔ダグラスは男らしいまた情の深い少年であった。ラルフ兄弟（弟をクリスティー Christie と云う）の事を想うとき、私は言い難きものを感ずる。良き小説は道徳書類の表し得ぬ美わしきあるものを与えてくれる。詩や小説はそれ自身真理を表現しているときに、聖書の最もよき註解の一つである〕

……

ピクニック、15日に〔神田〕十拳君に会わなかったので16日にはピクニックなきものと考えて居た、ところが16日になると不意に行こうじゃないかという事になる。その日は前夜の桐法会がたたって10時10分前に起床し、十拳君の「外交史」を返さんがために朝食をぬきに

した日なので大いにまごつかざるを得なかったけれども、よき天気ではあり、正ちゃんを少しでも慰めたかったので、やっぱり相談合の上出かけることにきめる。正ちゃんの都合もよかった。堤――大宮八幡――堀ノ内、あげまん――十拳君――おそば。もう武蔵野の秋は酣で、初冬は将に来ようとして居る。櫟の林は美しい。林の中で一枚撮ってくれたけれども、うまく写ったかしら。済美学校の中へも入って見た。よき池があった。星を仰ぎつつ、〔……〕に君の勉強は実に贅沢だと言いつつ帰る。翌日驚くべき速度を以て「注意した効があったとお思いになる日が近い内に来る様に致します」という手紙を得た。僕はこのいと早き手紙の Bedeutung（ベドイツング）〔意味〕を大ならしむる術を知らない。……

○1918年11月24日（日曜）

朝ルカ伝を読む。

日本訳には、主の言を信ぜし者は幸なり、とある。改訳には、信ぜしものは幸なる哉とある。英訳には、

And blessed is she that believed.

とある。ただ独逸訳だけは

“45 Und glückselig ist, die geglaubt hat; denn es wird erfüllt werden, was ihr vom Herrn gesagt worden ist!”

「信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり」（ルカ1・45）

とある。僕にはルカ伝第1章45節は独逸訳が好いと思われる。〔この独逸訳はルーテル訳である。この訳は「信ぜし汝は幸なるかな……」と第二人称を用いている〕。エリザベスは

Behold the housemaid of the Load: be it unto me according to thy word. (Luke,1-38)

〔「視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく我になれかし」（ルカ1・38）〕

と言い得たマリヤを讃めたのである。心の正しき人は談の相手を讃めるのに一般化した讃辞を使わねばならぬ遠慮はいらない。思うがままに我が心を発露せしむるを以て足る。エリザベスには甲をほめんがために甲をほめ切れず〔甲をほめ得ずと同義〕、一般的甲をほむるに出すべき言を用うる程に他人の善に対する嫉はなかった。彼は目の前の我が姪に心からの祝福の声をあげたのである。しかしこの詮索だては小事にとどまる。ルカ伝第1章45節は単純なる一行ではない。ルカ伝第1章の一部である。ルカ伝の一部である。ルカ伝第1章の意義は何、ルカ伝は何という所まで早く行かねばならない。もっともっと勉強しなければならない。

午、浅はか町〔浅嘉町のこと〕へ行く。つかれたとは言いながら、お客の前で足を出した詫にである。或は僕の真意は軽くとられすぎたかも知れない。

青年会館へ廻る。

腓利門（ピレモン）書の続講である。前週の分とも、まとむべきよき場所の様に思われるから果たしてうまく出来るかどうか判らぬが註解を試みて見る。

先生の議論は単なる腓利門書の講義ではない、聖書全部神言説の立場に於ける夫（それ）である。

題そのものは大きくない、しかし言わねばならぬ事は多く、深い。

〔以下ノート12頁にわたって講義の内容が認（したた）められてある。これが内村先生のものであると云う立場からはここに載せるべきでない。しかし樅の日記の一部と云う見地、並びに言通りの筆記ではなく、筆者の気持が読み得る立場から、次号に載せるつもりである。〕

＊

「みどり葉」（1）

残樅

然（しか）はあれど昼はエホバその憐憫（あわれみ）をほどこし給う。
夜はその歌われと共に在り、
此のうたはわがいのちの神にささぐる祈りなり。

――詩篇第42篇第8節

1927年秋〔5年前に詠みしもの、筆を加えたり〕

1　聖手により大浪小波乗り切りて目指すはかなたの岸高き国。

2　人はいね夜は更けにけりわれ独り夜明け待たなん灯火（ともしび）の下（もと）。

――9月22日夜

3　語るべき友のなければ筆執りて何ごとか書く祈りに寄せて。

――東北の友に

4　月の夜や母思うこの心には秋のあわれぞいやまさりゆく。

――失明の母を想いて

5　酒槽を独りにて践（ふ）む「羔」の此の雄編を繰返し読む。

――恩師の詩をよみて

6　独り坐し天（そら）を仰ぎてものすなりわが歌ごころ秋空よ知れ。

7
戦いて完膚なきまで傷くも戦避くるな男児にしあれば。

8
わがために労せし母の来し方をみ顔の小皺に見るこの胸は。

9
生きながらわが顔知らで去りぬべき母を想えば泪止まらず。

10
言い難きこと多からん母君の胸中しのべば悔いぞ多かる。

11
コスモスよ聖国来らば母上を心ゆくまで咲きて迎えよ。

——庭のコスモスを見て

12
ただ一つわが歩むべき道ぞあるさわがしからぬ愛の細道。

13
亡き兄と光を見ざる母君を思えばわが在る意義深きかも。

14
わが師をばなお幾年も苦しめん讃歌を思いてみ名をし呼ばう。

15
池の端に傘さし来ればその面に雨脚躍りて玉はしりたり。

——10月28日

16
夕暮れて森の細道帰るわれ歩くを好みし兄をししぬぶ。

17
二羽の鳩隣家の屋根に降り立ちぬその翼の色真白なりけり。

18
夕まぐれ森さわがせて白雨の近よるけはい風かとも思う。

19
月を見てああわが友と呼びし声虚空に消えぬききたるや君。

20
夜もすがらわれをまもりてまめやかに月の光は照らしけるかも。

——2月10日、戸を閉さでねむる

21
とく起きて幾朝われは星を見しまたとなからん預言書の秋。

——曙の明星を見し秋

22
何人が弾ずべかりし古き琴の歌調に高し東洋のそら。

——先生の詩のこと

23
人類の永き眠りを破るべき讃歌の力のおごそかさかな。

——先生のうたのこと

24　うつし世の恋と宝を塵と踏むシュラミの処女幾人かある。

——雅歌書をよみて

11月13日朝　擱筆

＊

斯くてかれらスコテより進みて曠野の端なるエタムに幕張す。
エホバかれらの前に往きたまい、昼は雲の柱をもてかれらを導き
夜は火の柱をもて彼らを照らして、昼夜往きすすましめたもう。

——出エジプト記第13章第20～21節

＊

〔**参考**〕

著者が「羔」誌について言及している文章を著作集から拾う（小池辰雄文庫編集者の註）。

○著作集第3巻『無の神学』第2部「無の神学への道」第1章「祈りの宗教哲学」より

［附記］

この「祈りの宗教哲学」〔「羔」第2号〕の前に「祈り以前の問題」〔「羔」第1号〕という論説を書いた。それがどうも見当らないのが残念である。実は毎月、論説や随想や翻訳や詩や和歌や聖書解説などを原稿用紙六、七十枚書いて、これを糸でつづり表紙をつけて『羔』と題する綴本を作って、(1)結婚の日まで丁度一年間、十三冊書いた。それが私の結婚準備というものであった。その中からすでに印刷に附したものもあるが、この「祈りの宗教哲学」は今回はじめてである。ただし原作の旧い仮名づかいはよみにくいので新しくした。

もう半世紀も昔、二十代の終りにこんなことを書いたかと自らあやしむばかりである。またまことに不思議に思う。「祈り」こそ私の生涯のやはりαでありωであることを。しかもこのαの文章で既に聖霊のことに確然と触れているのに驚いている。「聖霊を受けた始めの日」と記しているが、たしかにある感銘があったのであろうが、まだ決定的ではなかった。決定的な受霊は残念ながらそれから約二十年後１９５０年の晩秋である。

〔文庫編集者註：(1)「１９３０年、内村・藤井両巨星が天界に昇ったあと、三年間私は独りで日曜を遵っていた。その三年目なる１９３３年の12月23日に藤井武

先生の親友塚本虎二先生の司式で伊藤順子と結婚した。」（著作集第9巻『感想と紀行』第五章「人物回想」、五「塚本虎二先生」より）

○著作集第6巻『随想集』、第2部「偉大な偉人」、三「藤井武先生と私」より

はしがき

ここに載せる文章は今を去る27年前、１９３３年（昭和8年）7月及び8月に、『羔』誌第9号と第10号に書いた旧稿そのままである。ただ仮名づかいだけを変え、紙面の関係上、適宜カットしたところあるだけである。〔　〕内はこのたびの補足。『羔』誌というのは全く私的なもので、原稿用紙に書いたままのもので、誰に見せるというものでもなかったから、未発表のものである。研究、論説、詩歌、随筆といったものを１９３２年11月から毎月書いて翌年11月でひとまず筆を擱(お)いた私個人としては、極めてなつかしい想い出のものである。

この度、藤井先生三十周年を、去る7月14日にただ独りで迎え、その半日を『羔の婚姻』で読み暮らした。7月末日、久しぶりでごったがえしの書斎の整理をしていたら、箱の中から右の『羔』誌が13冊出てきた。表紙の目次を次々と見たら、『藤井先生三周年記念号』（「羔」第9号）というのが目についたので、開いて読んでみると、三周年の所感も、三十年を迎えた今日この頃の私も全く同じであるのに驚き且つ喜んだ次第である。このまま三十周年記念号として発表しようと直ぐ思いあたり、奇しき天来のみちびきに感謝した。今から見れば勿論当時の考え方には不備の点もある。私の信仰内容は進展して、死に至るまでやまないであろう。しかしこれを読んで、本質的にいかに同質的なものが貫いているかを見てあやしむばかりである。何を書いたかを全く忘れていたが、かくも今昔一貫しているとは。

『羔』9号所載のものは、藤井先生を特にたましいの世界での恩師としてもつ私が、いわば無教会における師弟関係というものは、どのようなものであるか、またあるべきかの問題を念として筆を進めているような「師弟論」といってよいもの。そこで、これを標題とした。今の私としてなお補筆すべきものがあるが、旧稿をなるべくそのままにしたい気もちから、補足はわずかにとどめた。

『羔』第10号所載のものは、師弟の具体的個人的な想い出の記の一端である。主として職業のことに関するので、「天職論」と名づける。〔　〕内はすべて今回第34号〔「曠野の愛」誌〕のための補筆。